

歴史を歩く66 照日神社



照日神社は、国道269号線と県道64号線がぶつかる三叉路沿いのこ

んもりとした山の上に建っている。獅子隈山といわれるこの場所は、鎮守の森として地域の人びとから親しまれ、大切にされてきた。現在、その境内には照日神社の本殿・拝殿のほかに、観音堂・轟神社・稲荷神社・水神・火の神なども祀られている。1つ1つをゆっくり巡っていると1時間はあっという間に過ぎてしまう。この荒佐野の地に神社が創建されたのは、今から327年前のことである。大坂の摂津・河内・和泉から移住してきた人びとが、伊勢神宮から神霊を勧請し祀ったことに始まる。荒佐野の集落はこの神社の南側をと



県道64号線沿いから見た獅子隈山

り囲むように岡・中小路・倉元・西谷・佐土原と形成された。大坂からの移住には当時の世情が大きく関係していた。荒佐野への移住から遡ること90年近く前、慶長5年(1600年)に起きた天下分け目の戦いといわれる『関ヶ原の戦い』により、徳川家が豊臣方に勝利し、以降徳川の時代となった。豊臣政権のもとで恩恵を受けていた大坂の住民たちは、徳川幕府の政治に不満を持ち、中には大坂と深い交わりのあった島津家を頼り、島津の領地への移住を決意するものも現れたのである。その中心人物となった摂津の国の郡奉行・出原次左衛門は、第2代薩摩藩主島津光久に移住許可を得て、元禄元年(1688年)〜元禄7年の間、4回にわたり計128名が荒佐野へ移住した。

荒野を拓いていく新天地での生活の中で、移住者たちの心の拠り所となったのが神社である。当時は伊勢神社と称されていた。出原次左衛門は移住に先立ち伊勢の国へ行き、五十鈴原の宮守の朝日巫という人物

にお願いして、勧請を受けた天照皇大神の神霊を荒佐野まで捧持してもらったという。獅子隈山の上に建ったお社には、藩公の許可のもと、天照皇大神・八幡大菩薩・住吉大明神・熊野大権現・春日大明神が祭神として祀られたと記録されている。天下大平・国土安穩・国家安全・武運長久・当村氏子息災・五穀豊穰を祈願し祀られた神々である。藩公から許可を得たのが元禄2年2月11日であったことから、毎年2月11日を例祭日として祭礼を行うようになったといわれるが、暦の変わった頃から3月11日が例祭日となり、現在では3月11日に近い日曜日になっている。

朝日巫の腰巻が天照皇大神の神話にならない縦縞であったので、婦人たちは同じ腰巻は恐れ多いとして、必ず横縞のものを着けるといいう習慣があったことや、昭和36年(1961年)に鉄筋コンクリート製の鳥居が建てられるまでは、伊勢神宮にならって20年毎に鳥居の建て替えが行われていたことから、荒佐野の人びとのお伊勢様への篤い信仰心が伝わってくる。そのような伊勢神社がなぜ『照日神社』と称されるようになったのだろうか?もともと照日神社という神社は現在の志布志市有明町平野にあった野方村の村社である。明治時

代には神社の数を減らし、残った神社に経費を集中させ、威厳を保たせるための合併・整理を図る政策が進められようとしていた。そのような中で明治8年(1875年)、村社ではあるが敷地も狭く資産もなかった照日神社と、無格社ながら場所も良く、資産もあり、社殿も新しく、広く世間に知られていた伊勢神社の合祀が行われた。伊勢神社は、村社に昇格すること引きかえに、創建から186年間お伊勢様として親しまれてきたその名を廃し、照日神社となったのである。

今から300年以上も昔、移住者たちが最初に訪れた荒野には、どのような風景が広がっていたのだろうか?照日神社の鎮守の森・獅子隈山はその移りゆく様子を見守ってきた。そしてこれからも、開拓者たちの精神が息づくこの地域を見守り続けていくのだろう。



境内の展望所から眺めた荒佐野一帯